

書評

アレクシオス・サヴィディス (2016) 『トレビゾンドの大コムネノス朝帝国史 (1204-1461) 第三版』
テッサロニキ*

ΣΑΒΒΙΔΗΣ, Αλεξίος (2016a) *Ιστορία της Αυτοκρατορίας των Μεγάλων Κομνηνών της
Τραπεζούντας (1204-1461), Θεσσαλονίκη*

岩崎武瑠 IWASAKI, Takeru

独立研究者

トレビゾンド帝国の歴史を扱う類書の中から新しい一冊が登場した。トレビゾンド帝国とは第4回十字軍と同時代に黒海南岸の都市トレビゾンド（現トルコのトラブゾン）を中心に成立した、コムネノス家を皇帝に戴くビザンツ系政権¹である。アナトリア半島の他の地域においてベイリクと呼ばれるトルコ系君侯国が割拠する中、トレビゾンド帝室はトルコ系君侯やビザンツ帝国、ジョージア（カルトリ）系君主などと政略結婚を繰り返し、ビザンツ帝国滅亡後も8年間命脈を保った。

トレビゾンド帝国はこれまで長らくギリシア史やビザンツ史に付随する「エキゾチックな付録 exotic appendix」として扱われてきた（本書：11; Bryer 1980: i）。しかしながら、トレビゾンド帝国は後期ビザンツの他の政権、つまりバルカン半島およびエーゲ海に位置する諸政権から離れた地域に存在するため、ビザンツ帝国史の範疇では扱いつらいという側面がある。トレビゾンド帝国は以下の観点から研究されてきた。一つ目はトルコ系君侯や白羊朝などのイスラーム諸国との関係史である。二つ目はジェノヴァやヴェネツィアとの黒海交易に由来する経済史である。三つ目はトレビゾンド帝国領内のマツカ【Ματζούκα】（現トルコのマチュカ【Maçka】）にあるヴァゼロン修道院【Μονή Βαζελώνος】の文書資料や、オスマン帝国支配下の租税台帳を使用した社会史の分析である。この観点では、マツカの農村社会についての分析や、コーカサス系などをはじめとする領内の非ギリシア系などがトレビゾンド帝国内でどう振舞ったのかについてを扱って

* Σαββίδης, Α. (2016a) *Ιστορία της Αυτοκρατορίας των Μεγάλων Κομνηνών της Τραπεζούντας (1204-1461)*, Θεσσαλονίκη: Εκδόσεις Κυριακίδης.

1 近年の研究においては第4回十字軍以降のビザンツ系政権を帝国と呼ぶには相応しくないとする研究上の立場が一定数あり、トレビゾンド「帝国」などの括弧付きで表記されること（中谷 2020: 257）や、トレビゾンド国 Trapezuntine state などのように表記されることも多い（Asp 2019: 1-4）。トレビゾンド帝国もビザンツ帝国と同様に公的文書における君主号がバシレウスであることに加え、本書においてトレビゾンド帝国 αυτοκρατορία της Τραπεζούντας という表現がなされていることから、本稿でもそれに合わせトレビゾンド帝国という表記を用いる。

いる。四つ目は後期ビザンツ系諸政権の政治史の研究である。本書はこのうちの四番目に近い。後期ビザンツ諸政権のうち、小アジア北東の地域において2世紀以上「中世ヘレニズム」の命脈を保ち、生き残った国家としてトレビゾンド帝国を位置付けようと試みている。そのため、トレビゾンド帝国がビザンツ帝国を模したギリシア系の国家であり、他の後期ビザンツ諸都市同様に文人や学者を多数輩出した国家でもあるということに重要視している。

本書はギリシアのビザンツ史家アレクシオス・G・K・サヴィディスによる著書である。サヴィディスはギリシアのビザンツ史家であり、ポントス研究委員会の副委員長を務めている²。

2010年代後半以降、本邦においてビザンツ帝国史に関する著書や研究が多く世に出ている³。その一方、第4回十字軍とほぼ同時期に生まれたビザンツ系政権であるトレビゾンド帝国については海外では既に多く研究されているものの、本邦では端緒を開いたばかりである。それゆえにトレビゾンド帝国について日本語でアクセスできる情報は断片的である。こうした研究状況の「空白」を埋めるべく、トレビゾンド帝国について研究を志す初学者およびトレビゾンドに関心のある隣接分野の研究者に紹介したいのが、本書評で取り上げる『トレビゾンドの大コムネノス朝帝国史(1204-1461)』である。

トレビゾンド帝国史の通史の刊行状況について簡単に述べたい。英語著作はミラーが1926年に『トレビゾンド 最後のギリシア帝国』【Trebizond: The Last Greek Empire】を刊行して以来、改訂版を除いて出版されていない。ベルギーではジャンサンがフランス語で『コルキスにおけるトレビゾンド』【Trébizonde en Colchide】を1967年に刊行し、ギリシアでは他にもリベロプーロスが1999年に『ビザンツ期ポントス トレビゾンド帝国』【Ο Βυζαντινός Πόντος – Η Αυτοκρατορία της Τραπεζούντας 1204-1461】を刊行している。ただし、サヴィディス以前のギリシアでのトレビゾンド帝国を扱う通史では主としてポントス地方の通史の一部として触れられることが多く、史料の記述が無批判に使用されることも多々あった。ロシアでは対ジェノヴァと対ヴェネツィアおよび対西洋国家関係史を中心に研究しているカルポフが2007年に『トレビゾンド帝国史』【История Трапезундской империи】の第一版を、2017年に10年間の研究成果を反映して大幅に加筆した第二版を出版している。イギリスではトレビゾンド帝国の対東方関係史、社会史、ポントスの地誌など幅広い分野に渡り研究したブライヤーが出版したBryer 1980, Bryer and Winfield 1985, Bryer 1988aなどの論集や研究書によりトレビゾンド帝国史研究は大幅な更新がなされたが、これらの研究成果を反映した通史や概説書は英語では出版されなかった。トレビ

2 最後のトレビゾンド府主教フリサンソス【Χρύσανθος】やポントス・ギリシア語の研究家のアンシモス・パパドプロス【Ανθίμος Παπαδόπουλος】らがアテネで立ち上げた、ポントスの歴史、文化、民間伝承、言語についてを研究する学術団体である。定期刊行雑誌『ポントス誌』【Αρχαίον Πόντου】のほか、テーマ毎の別冊版も刊行している。

3 日本語で読めるトレビゾンド帝国史に関する研究については根津 2011, キング 2017, 平野 2020, 平野 2021などを参照されたい。

ゾンド帝国史の隣接分野においてトレビゾンド史を記述する場合はミラーの概説を見て記述することが多く、古い学説が訂正されぬまま無批判に利用されていることも多々あった。こういう状況に陥らぬようにするためにも本書のような文献は重要といえよう。

本書はサヴィディスがポントス研究委員会から2005年に出版した『トレビゾンドとポントスの大コムネノス朝』【Οι Μεγάλοι Κομνηνοί της Τραπεζούντας και του Πόντου】（『ポントス誌』の別冊編）の増補改訂版である。トレビゾンド帝国史について時系列順に扱ったのち、補論として歴代皇帝表、トレビゾンド帝国における文人や学者、トレビゾンド帝国領内の名望家のツァニキテス【Τζανιχίτης】家のプロソポグラフィ等について、本編では語れなかった部分について言及している。増補時に新たにリプリント史料と絵画史料を追加した。本書はトレビゾンド帝国史に関心がある初心者の入門書としても使える上、ビザンツ史は勿論のこと、ルーム・セルジューク朝やオスマン帝国などの隣接分野の研究者がトレビゾンド帝国史の概略を掴むことができるという点においても重要である。カルポフの『トレビゾンド帝国史』は地域ごとの対外関係史やテーマ史から見るトレビゾンド帝国史という形式のため、時系列順の叙述形式の本書とは性質が大きく異なる⁴。

章立ては以下の通りである。

序論

第一章 13世紀の小アジア・ヘレニズムのビザンツ帝国の設立と建国(1204-1297)

第二章 14世紀——苦悩の維持と東の間の繁栄(1297-1390)

第三章 70年の苦悩と15世紀の外交的な不整合——大コムネノス朝国家の最後の時代と滅亡(1390-1461)

補論一 歴代皇帝表

補論二 トレビゾンド帝国における学者と科学者

補論三 ポントスの家門ツァニキテス家について

補論四 14-15世紀における近隣諸国に対するトレビゾンドの外交姿勢のついて

抄録

参考文献リスト

索引

補遺

序論ではトレビゾンド帝国が辿ってきた歴史を概略し、続いて小アジアにおいて最も長く命脈を保ったビザンツ系政権であることと、元来ビザンツ帝国の頃からあったポントスの地方主義を

4 サヴィディスによる対外関係史でまとめたトレビゾンド帝国史の文献は Σαββίδης 2016b を参照されたい。

色濃く残す国家であることなどから、筆者によるトレビゾンド帝国を研究する意義について述べている。しかしながら、本文についてはカルポフが言及している通り、「中世ヘレニズム」を継承したとは言いながらもビザンツ時代のポントス(=テマ・カルディア)の説明を省略し、トレビゾンド帝国の建国から叙述を始めている(Карпов 2007: 272)。ゆえに、序章で述べていることが本文に反映されているとは言い難い。恐らくトレビゾンド帝国における「中世ヘレニズム」の継承について言及している箇所は、どちらかと言えば補論におけるトレビゾンド帝国についての議論の方が相応しいと言えよう。また、改訂の際に本文に加筆できなかった2010年代中葉までの研究レビューを記載している。

第一章では建国期からヨハネス2世の治世までを扱う。建国期については、トレビゾンド帝国に対するジョージアの影響の度合いについて、ジョージア側の研究なども交えて高く見積もる研究と低く見積もる研究とを紹介している。トレビゾンド皇帝アレクシオス1世とダヴィドがトレビゾンド帝国建国前にジョージア宮廷に滞在していた期間について、数多くの説を網羅している。また、ニカイアやそれに続くコンスタンティノープルについては競合関係にあると説明している。ルーム・セルジューク朝との封臣関係の時期やモンゴル服属下でのシノペをめぐるトゥルクマーンとの争い、ニュンファイオン条約を契機としたジェノヴァやヴェネツィアの黒海進出とトレビゾンド帝国が関係する史料などについても断片的な史料の記述を示している。

第一章において特筆すべき点は以下の通りである。対ルーム・セルジューク朝史についてはサヴィディス自身の専門分野のため、研究上の自分の説を多く使用している⁵。トレビゾンド帝国が小アジア北東部において生き残った理由を知るための知識としてルーム・セルジューク朝について多くの前提知識を記述している。

第二章は内政面では比較的安定していたアレクシオス2世の治世、内憂外患に見舞われた政情的に不安定な14世紀中葉、加えてアレクシオス3世の治世における「束の間の繁栄」を扱う。第二章前半においてはアレクシオス2世時代の政治史と対外関係史およびトレビゾンド内乱について説明している。後半についてはアレクシオス3世の治世のほぼ同時代を生きた廷臣ミカエル・パンアレトス【Μιχαήλ Πανάρετος】による『パンアレトス年代記⁶』【Χρονικό του Πανάρετου】に沿う形で古典研究と新しい研究とを対照させて紹介している。1350年代については内乱の終結と白羊朝との婚姻関係の樹立を扱う。アレクシオス3世は即位後に内乱を鎮圧すべく名望家を次々と逮捕した。内乱の最終局面においてニケタス・スコラリオス【Νικήτας Σχολάριος】らの抵

5 対セルジューク朝関係史について更に深めたい場合は Shukurov 2005 が英語でよりよく簡潔にまとまっているのでこちらを参照されたい。

6 正式名称は『大コムネノス家のトレビゾンド諸皇帝について、各々がどのように、いつからいつまで支配したか』【Περὶ τῶν τῆς Τραπεζοῦντος βασιλέων τῶν Μεγάλων Κομνηνῶν, ὅπως καὶ πότε καὶ πόσον ἕκαστος ἐβασίλευσεν】であるが、本項では、トレビゾンド帝国研究で通称として用いられる『パンアレトス年代記』という表記を使用する。

抗をうけたが、トレビゾンド帝国領内の離反的な名望家の力を削ぐことに成功した⁷。

サヴィディスがアレクシオス2世の治世について言及する際にコンスタンティノス・ルキテス【Κωνσταντίνος Λουκίτης】による『アレクシオス2世葬送演説』に見られるような旧約聖書の登場人物やアレクサンドロス大王の徳に準えて賛美している記述を引くなど、アレクシオス2世が同時代のトレビゾンド帝国においてどれほど絶賛されていたか明快に記述している。(本書87頁)。内乱期⁸からアレクシオス3世の治世にかけてはミカエル・パンアレトスの同時代となるため『パンアレトス年代記』の引用も数多く存在する。また、内乱期などを中心に『パンアレトス年代記』の記述をなぞる一方で、補完しうる史料としてアンドレアス・リバデノス【Ανδρέας Λιβαδηός】の『ペリエゲシス』【Περιήγησις】も引用している。基本は史料を引用しながら記述しているが、随所に史料の問題点を指摘している箇所がある(本書113頁など)。巻末の史料を見比べつつ読むとより要点が掴みやすいであろう。ただし、著者が引用しているページ番号はランブシディス版のものであり、巻末附録のファルメライヤー版とは異なるので気をつけたい。

第三章ではアレクシオス3世死後の不安定な時代からトレビゾンド帝国滅亡後のダヴィドの死およびデスピナ・ハトゥンのその後の活動までを扱う。前半については史料上の制約から叙述が困難ではあるが、旅行記やパンアレトス年代記続編、後期からポスト・ビザンツ期の史料群などの断片的な史料をそのまま引用して現状での大まかな研究状況と、押さえておくべき重要な知識とを示している。ヨハネス4世の治世における白羊朝との外交戦略とダヴィドの短い統治とオスマン帝国によるトレビゾンド帝国陥落、トレビゾンド帝室の成員の行く末を詳述する。

マヌエル3世とアレクシオス4世の親子は対立しつつも共同統治がなされた。この共同統治についてはティムール帝国への使節団のクラビホの旅行記の訳を引用して対立の様子を伝えている。アレクシオス4世とヨハネス4世との親子対立についてはヨハネス4世が父であるアレクシオス4世を死なせるに至るまでの醜聞をカルココンデュレス【Χαλκοκονδύλης】の『歴史』に沿って簡潔にまとめている。注釈において『歴史』の原文を引用している。また第三版においてはポントス研究委員会の中心人物の一人のエレフセリアディスが作劇した最後のトレビゾンド皇帝ダヴィドについての戯曲が増補後の2014年に出たという情報も加筆している。

補論一は歴代皇帝とその在位年間の一覧表である。トレビゾンド皇帝の在位年間については、ヨハネス4世の死のタイミングは不明として、幅をもたせた説を採用している。

補論二ではトレビゾンド帝国で活躍した著述家と天文学者などの学者の生涯と著書について扱う。それぞれ文筆家の著書の史料紹介として役立つ記述が多く、トレビゾンド帝国史の史料を読む上での史料解題として欠かせない情報を多く含む。また、コンスタンティノス・ルキテスや

7 サヴィディスは一貫して Νικήτας Σχολάριος と綴っているが、パンアレトス年代記などにおいては Νικήτας Σχολάρις と綴られており、研究によって表記の揺れがある。

8 内乱期の定義としてはブライヤーの区分法の1332年から1363年までとする説を引用しながらも、内乱の主だった動きが治った時期をおよそ1355年と看做している(本書91頁)。

パンアレトスなどのトレビゾンド帝国で活躍した文筆家のみならず、キオニアデス【Χιονιάδης】やクリュソコッケス【Χρυσοκόκκης】をはじめとするトレビゾンドで研究を行った科学者を紹介するのは、トレビゾンド帝国がビザンツ世界の科学研究において重要な役割を果たしていたことを示す。

補論三ではトレビゾンド帝国の在地の名望家のうちの一つであるツアニキテス家についてのプロソポグラフィを扱う。このプロソポグラフィは『パライオロゴス朝期プロソポグラフィ辞典』から引用するに留まらず、この辞典に立項される人物がトレビゾンド帝国史において何をした人物なのかについても丁寧に扱っている。トレビゾンド帝国時代においてツアニキテス家と同語源のものとして記録されている人名についても紹介しているが、これらはツアニキテス家と関係があるというよりは寧ろ、コーカサスの民族名のツァンとの直接の関連性があるように評者には思える。

補論四では第二章や第三章では扱いきれなかった14-15世紀のトレビゾンド帝国と隣国との外交について扱う。ここでは対東方関係史のみならず、ビザンツ帝国やレスヴォス島のガッティルジオ【Gattilusio】家、セルビアなどとの関係史についても言及している点について、後期トレビゾンド帝国において展開された外交史の華々しさを物語っている。しかしながら、幾つか古い研究の説を継承している箇所が見受けられるので、下に述べる学説史比較表で整理する。

補遺では『パンアレトス年代記』、ヨハネス・ラザロプロス【Ιωάννης Λαζαρόπουλος】によるトレビゾンドの守護聖人聖エウゲニオスの奇跡譚、アレクシオス3世の黄金印璽文書をリプリント史料として記載している。これらは Fallmerayer 1843-44 などに依拠する版とみられる。

全体として史料や研究文献を多く引用しながら叙述を行っている。各章の始まりにはその章の基本文献や史料の重要な記述を直接引用しているのが特徴的である。例えば、第二章において引用しているニコラオス・イコノミディスの「大コムネノス朝の書記局について：帝国の伝統と政治的現実」を引用している。この時代におけるトレビゾンド帝国とビザンツ帝国との関係について、トレビゾンド帝国はビザンツ帝国の習慣に従ったが一部変更を余儀なくされたことから、トレビゾンド帝国はたとえビザンツ帝国から独立していても衛星国家であったとしてこの時代の両者の関係を定義している。主要な研究の中から定説となっているものを選び出して読めるようにしているのは、トレビゾンド帝国を研究しようとしている人にとって便利であるといえる。そのため、このように史料や研究の引用または訳出に触れながら読み進めることができる点は本書最大級の長所といえよう。一冊の中で通史とそれに関連する主要な研究に触れることができる点は高く評価できる。

なお本書80頁で示されるトレビゾンド女帝の記述については注意を要する。「ミカエル8世の非嫡出子であり、バシレイオス大コムネノスの不妊の寡婦のエウドキア・パライオロギナ【Ευδοκία Παλαιολογίνα】とあるが、正しくは「アンドロニコス3世の非嫡出子であり、バシレイオス大コムネノスの不妊の寡婦のエイレネー・パライオロギナ【Ειρήνη Παλαιολογίνα】である。本書218頁註390においてマリアと記載しているのはエウドキアの誤りである。また、

アドリアノーブルの監獄を脱獄してシノペへと亡命して客死したのはヨハネス3世であり、マヌエル3世ではない。ただし、マヌエル3世の治世の話を改めてしているので、ここは純粋な記載ミスだと考えてよいであろう。

以下に本書で示されている学説と他の研究での学説とを比較した表を示す。本書において使用されている学説が他の学説と比較しても多くの面において新しい学説が採用されていて、更新した自説を使用している箇所も散見される。

説	本書	他の先行研究
トレビゾン ド建国時の ジョージア の影響につ いて	ジョージアの強い影響を示す研究と、それを否定する研究との両論併記をしている。複数のジョージア側の研究にもあたって、後のトレビゾンド皇帝アレクシオス1世と弟ダヴィドがジョージアのタマル女王の宮廷に一定期間滞在していたことを示している。ただし、いつジョージアに到着したかについては複数説存在する。	ジョージアの強い影響を認める研究はヴァシリエフほかロシア系やジョージア系の研究に顕著である (Vasiliev 1936)。一方、フィンレイやヨルガなどの研究はジョージアの過度な影響を疑問視する傾向にある (Iorga 1936)。
アレクシオ ス1世の弟 ダヴィドの 末路につ いて	シノペでの敗死説を否定した上で、ヴァトペディ修道院【Μονή Βατοπεσίου】でダニエルという僧として死亡した説を採用している（本書37-38頁）。	ミラーとヴァシリエフはファルメライヤーに倣いシノペでの敗死説 (Miller 1926: 18; Vasiliev 1936: 29) を提示しているが、ブライヤーはアトス山ヴァトペディ修道院でダニエルという名の僧として死亡した説を採用している (Bryer 1988b: 134-135)。シュクロフはダヴィドがアレクシオス1世へのクーデターを起こし、これに失敗して修道院へと送られたとする仮説を示している (Shukurov 2001b)。カルポフは書評においてサヴィデイスが上記の説を採用せずファルメライヤー説を採用していると批判しているが、この批判は妥当ではない (Карпов 2007 272-273)。

<p>ルーム・セルジューク朝軍を撃退した「マツカ人」の正体</p>	<p>自身の論文を典拠とし、コーカサスのツァン系の末裔説を支持している(本書 59 頁 Σαββίδης 2002)。</p>	<p>ブライヤーはコーカサス系というよりはポントス・ギリシア人と見てよいと分析している (Bryer 1982: 78-80)。カルポフは自著でサヴィディス説を引いている (Карпов 2017: 137)。</p>
<p>トレビゾンド内乱について</p>	<p>通説を踏襲して二派閥の対立説を採用するが、親コンスタンティノーブル派の「スコラリオイ」【Σχολάριοι】と「アムツァンタリオイ」【Αμυτζανταριοί】を筆頭とする在地派との対立として解釈している。しかしながら、アナ・アナクトル【Αννα Αναχουτλού】の名前について、兄弟のミカエル・アザクトル【Μιχαήλ Αζαχουτλού】の名を持ってきて、「又はアザクトル【ή Αζαχουτλού】」と度々示している(本書 80 頁, 98 頁) が、このような説は他では認められていない。</p>	<p>ファルメライヤー以降、親コンスタンティノーブル派對在地派という二極化でもって解釈されていた。カルポフは定説を継承しつつも、単純な二極化については疑問視し、親コンスタンティノーブル派のようなものは存在しなかったと主張している (Карпов 1974)。ブライヤーは党派自体を再定義して、スコラリオイをユスティニアヌス帝時代からの近衛兵とする説を否定した (Bryer 1984)。</p>
<p>「カリュビアの君主」</p>	<p>本書ではハジエミール【Χατζί-εμίρ】という表記が使用されている。</p>	<p>ミラーまでの通史ではハジ・オマルと表記していたが、ブライヤーが『パンアレトス年代記』原文の【Χατζυμύρις】というギリシア文字の綴りから、これはハジ・オマルとは読めないことを否定して、ハジエミールと読むべきだと主張した (Bryer 1975)。キングはミラーの概説の説を無批判に継承している (キング 2017: 179)</p>

トレビゾン ド皇女エウ ドキアの再 婚相手につ いて	ヨハネス5世説に異を唱え、ミラー 説を否定する学説を採用している(本 書 131頁, 218頁)。	ミラーはエウドキアの結婚相手をマヌ エル2世の父と解釈してヨハネス5世 と結婚したとする説を採用している が、この説は近年の研究では否定され ている。詳細は平野 2020 を参照され たい。
アレクシオ ス4世の婚 姻政策につ いて	サヴィディスの専門とする時代が初 期史のためと評者は推測するが、こ の箇所は従来説を踏襲している。す なわち、アレクシオス4世はセルビ ア君主のジュラジ・ブランコヴィチ と黒羊朝君主ジャハーン・シャーと に娘を嫁がせたとしている(本書 145 頁, 215-216頁)。	Kuršanskis はアレクシオス4世の娘の 数は従来説よりも少なく見積もり、セ ルビア君主に嫁いだ娘や黒羊朝に嫁い だ娘の存在を否定している (Kuršanskis 1979: 245)。
ウズン・ハ サンに嫁い だデスピ ナの 名前につ いて	他の研究において時折誤ってカタリ ナの名前が使用されていることを指 摘し、テオドラ説を強調している(本 書 155頁, 216頁)。	ディールは、カタリナ説は元々デユカ ンジュによる研究において、「ハトウ ン」をカタリナと誤読したために生じ たものであり、正しくはテオドラだと して否定した。カタリナ説は根強く残 るが、評者の推測ではバービンガーが ディールの研究を知らずにデスピナ= カタリナ説を採用したためと推測して いる (Babinger 1992)。
最後のトレ ビゾンド皇 帝ダヴィド の処刑が行 われた日に ついて。	トゥキュディデス写本の欄外の「短 編年代記」の記述に基づき 1463年 11 月 1日説を支持している。恐らくは この日がダヴィドの聖名日として制 定されているからと評者は推測して いる。	定説では 11月 1日だが、カルポフは ヴェネツィアの文書館の 8月 21日付 の書簡史料にダヴィド一行が処刑され た旨を伝える記述があることから 11月 1日説を疑問視している (Карпов 2006: 136-137)。

本書は、初学者向けにトレビゾンド帝国の歴史を通時代的に考察しながらも一冊の中で重要な
先行研究の要旨や重要な史料の情報についても触れることができるという点で、工具書要素も

兼ねた概説書である。本書は英語文献やロシア語文献などの新しい海外の研究と照合して書かれた極めて質の高い文献である。また、トレビゾンド帝国が小アジアに生き残ったビザンツとして研究する意義を序論で提示したことが本書の意義である。トレビゾンド帝国において天文学をはじめとする科学研究が盛んに行われたことについて知る上でも、本書の学問的意義は計り知れない。Карпов 2017 は前提知識を既に持っている必要があり、より上級者向けであるのに対して、本書はトレビゾンド帝国の通史と補遺から前提知識となる文献や研究などの情報の網羅に事欠かない。欲を言えば、改訂時に新しい研究成果を加味して叙述全体を更新していないのはやや物足りない。だが、その後にも英語で読めるトレビゾンド帝国史の論文や新しいパンアレトス年代記の翻訳や研究が続々と世に出ているので、このような新しい研究成果を反映した通史が登場することがトレビゾンド帝国史研究の今後の課題である。

参考文献

- Asp-Talwar, A. (2016) "The Chronicle of Michael Panaretos", in A. Eastmond (ed.) *Byzantium's Other Empire: TREBIZOND*, Koç Üniversitesi Yayınları: 173-212.
- Asp, A. S. E. (2019) *Trebizond and Constantinople, 1204-1453*, University of Birmingham, Ph.D.
- Babinger, F. (1978) *Mehmed the Conqueror and His Time*, New Jersey: Princeton University Press.
- Bryer, A. (1966) "Trebizond and Serbia", *Αρχαίον Πόντου*, 27: 28-40.
- Bryer, A. (1975) "Greeks and Türkmens : The Pontic Exception", *Dumbarton Oaks Paper*, 29: 113-148.
- Bryer, A. (1980) *The Empire of Trebizond and the Pontos*, London: Variorum Reprints.
- Bryer, A. (1982) "Rural society in Matzouka", *Continuity and Change in Late Byzantine and Early Ottoman Society*, 53-95.
- Bryer, A. (1988a) *Peoples and Settlement in Anatolia and the Caucasus, 800-1900*, London: Variorum Reprints.
- Bryer, A. (1988b) "David Komnenos and Saint Eleutherios", *Αρχαίον Πόντου*, 42: 161-188.
- Bryer, A. and D. Winfield (1985) *The Byzantine Monuments and Topography of the Pontos Vol. I*, Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Diehl, C. (1913) "Catherine on Theodora?", *Byzantinische Zeitschrift*, 22: 88-89, Berlin: De Gruyter.
- Fallmerayer, J. P. (1843-44) *Original-Fragmente, Chroniken, Inschriften und anderes Materiale zur Geschichte des Kaiserthums Trapezunt*, München: Akad. Verl.
- Iorga, N. (1936) "Une nouvelle théorie sur l'origine et le caractère de l'empire de Trébizonde", *Revue Historique du Sud-Est Europe*, XIII: 172-176.
- Janssens, E. (1969) *Trébizonde en Colchide*, Presses universitaires de Bruxelles.
- Карпов, С. (2006) "Последний форпост Византии: падение трапезундской империи в 1461 году", *Вестник Истории Литературы Искусства*, 3: 129-145.
- Карпов, С. (2007) "Рецензия на: Savvides A.G.K. Οι Μεγάλοι Κομνηνοί της Τραπεζούντας και του Πόντου. Ιστορική επισκόπηση της βυζαντινής αυτοκρατορίας του μικροασιατικού ελληνισμού (1204-1461). Athenai, 2005 282 σ.", *Византийский Временник*, 66 (91): 272-274.
- Карпов, С. (2017) *История Трапезундской империи 2-е изд*, СПб: Алетейя.
- Kuršanskis, M. (1979) "La descendance d'Alexis IV, empereur de Trébizonde (Contribution à la prosopographie des Grand Comnènes)", *Revue des études byzantines*, 37: 239-247.
- Λυμπεροπουλος, Β. Χ. (1999) *Ο Βυζαντινός Πόντος - Η Αυτοκρατορία της Τραπεζούντας 1204-1461 Ο χώρος οι άνθρωποι - η οικονομία*, Αθήνα: Δημιουργία.
- Miller, W. (1926) *Trebizond, the last Greek empire*, London: Society for promoting Christian knowledge.
- Σαββιδης, Α. Γ. Κ. (2005) *Οι Μεγάλοι Κομνηνοί της Τραπεζούντας και του Πόντου*, Αθήνα: Επιτροπή Ποντιακών Μελετών.

- Σαββιδης, Α. Γ. Κ. (2016b) *Το κράτος των Μεγάλων Κομνηνών της Τραπεζούντας (1204–1461 μ. Χ.)*, Επιτροπή Ποντιακών Μελετών, Αθήνα.
- Шукуров, Р. (2001a) *Великие Комнины и Восток*, СПб: Алетея.
- Shukurov, R. (2001b) “The enigma of David Grand Komnenos”, *Mesogeios*, 12: 125-136.
- Σαββιδης, Α. Γ. Κ. (2002) “Τζαννοί - Τζανίτ - Τζανίκ - Τζανιχίτες : το πρόβλημα της επιβίωσης ενός καυκάσιου λαού στο βυζαντινό Πόντο των Μεγαλοκομνηνών”, *Αρχαίον Πόντου*, 49: 129-148.
- Shukurov, R. (2016) *The Byzantine Turks, 1204-1461*, Leiden: Brill.
- Vasiliev, A. A. (1936) “The Foundation of the Empire of Trebizond (1204-1222)”, *Speculum*, 11: 3-37.
- 平野智洋 (2020) 「トラペズス皇女エヴドキア・コムニとビザンツ皇帝コンスタンディノス 11 世の「祖父」の再婚について」『東海史學』 54: 21-34
- 平野智洋 (2021) 「ミハイル・パナレトス『トラペズスの諸皇帝について』(1)—— 第 1-37 章」『東海史學』 55: 25-41
- 中谷功治 (2020) 『ビザンツ帝国 千年の興亡と皇帝たち』中央公論新社
- 根津由喜夫 (2011) 『図説ビザンツ帝国：刻印された千年の記憶』河出書房新社